

目次

I 章 はじめに

1 ガイドライン作成の経緯と目的	2
1. 2011年版ガイドライン作成の経緯	2
2. 2016年版ガイドライン改訂の経緯	2
3. ガイドラインの目的	2
4. 2016年版における主な改訂点	2
2 ガイドラインの使用上の注意	4
1. 使用上の注意	4
2. 構成とインストラクション	5
3. 他の教育プログラムとの関係	6
3 エビデンスレベルと推奨の強さ	7
1. エビデンスレベル	7
2. 推奨の強さ	8
3. 推奨の強さとエビデンスレベルの臨床的意味	9
4 用語の定義と概念	11

II 章 背景知識

1 呼吸困難のメカニズム	14
1. 呼吸の調節機構	14
2. 呼吸困難の発生	15
① 呼吸困難の発生に関与する受容器	15
② 呼吸困難の発生のメカニズム	16
3. 呼吸困難の発生、認知、表出のメカニズム	16
2 呼吸不全の病態生理	18
1. 呼吸不全	18
① 肺胞低換気	18
② 換気血流比不均等	19
③ 拡散障害	19
④ シャント（右左シャント）	20
2. 換気障害	20
① 閉塞性換気障害	20
② 拘束性換気障害	21
③ 混合性換気障害	21

3 呼吸困難の原因	23
1. 呼吸困難の原因	23
① がんに関連した原因	23
② がん治療に関連した原因	23
③ がんとは関連しない原因	23
4 呼吸困難の評価	25
1. 使用が推奨されている評価尺度	25
① 呼吸困難の量的評価尺度	25
② 呼吸困難の質的評価尺度	27
③ 呼吸困難に伴う機能評価尺度	28
2. 医療従事者による呼吸困難の評価	28
3. まとめ	30
5 身体所見と検査	31
1. 問診	31
① 現病歴	31
② 既往歴・生活歴	31
③ 増悪因子・軽快因子	32
2. 身体所見	32
① Vital Signs	32
② 視診	32
③ 触診	33
④ 打診	33
⑤ 聴診	33
3. 検査所見	33
① 動脈血ガス分析/経皮的酸素飽和度	33
② 血液検査	34
③ 画像検査	34
6 酸素療法	36
1. 非侵襲的陽圧換気（NPPV）	36
① 定義	36
② メリットとデメリット	36
③ 一般的な適応	37
2. 高流量鼻カニューラ酸素療法（HFNC）	37
① 定義	37
② メリットとデメリット	37
③ 一般的な適応	38

- 死前喘鳴を有するがん患者の、喘鳴を軽減する有効な方法は何か？ 100

- ① イメージ療法 118
- ② 漸進的筋弛緩法 118
- 3. まとめ 119

IV章 非薬物療法

- 1 看護ケア** 106
 - 1. 呼吸法のトレーニング 106
 - 2. 送風 107
 - 3. 看護師によるフォローアッププログラム 107
 - 4. 身体的・精神的側面のサポートを統合した呼吸困難マネジメントプログラム 108
 - 5. ケアマネジメント 109
 - 6. まとめ 109
- 2 呼吸リハビリテーション** 111
 - 1. 呼吸リハビリテーションの目的 111
 - 2. 対象 111
 - 3. 呼吸リハビリテーションの構成要素 111
 - 4. がん患者に対する呼吸リハビリテーション 112
 - ① 呼吸リハビリテーションの考え方 112
 - ② 運動療法 112
 - ③ 呼吸理学療法 113
- 3 精神療法** 115
 - 1. 呼吸困難に対する精神療法 115
 - 2. まとめ 116
- 4 リラクゼーション** 117
 - 1. リラクゼーション法を含む複合的介入方法 117
 - 2. 単独介入としてのリラクゼーション法 117

V章 資料

- 1 作成過程** 122
 - 1. 概要 122
 - 2. 臨床疑問の設定 122
 - 3. 系統的文献検索 122
 - 4. 妥当性の検証 123
 - ① 1回目のデルファイラウンド 124
 - ② 2回目のデルファイラウンド 124
 - ③ 外部評価委員による評価 124
 - 5. 日本緩和医療学会の承認 124
 - 6. ガイドライン作成者と利益相反 124
- 2 文献検索式** 127
- 3 今後の検討課題** 141
 - 1. 今回のガイドラインでは、対応しなかったこと 141
 - 2. 用語の定義・背景知識について、今後検討が必要なこと 141
 - 3. 推奨について、今後の検討や新たな研究が必要なこと 141
- 索引 145